おくのほそ道（旅立ち）　＊＊＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

月日は百代の過客ア[ア]にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅[1]にして、旅を栖とす。古人[①]も多く旅[2]に死せるあり。予も、いづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年[イ]の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を払ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の関越えんと、そぞろ神[③]の物につきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて取るもの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付け替へて、三里に灸据うるより[a]、松島の月まづ心にかかりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移る[3]に、

草の戸[④]も住み替はる代ぞ雛[⑤]の家

表八句を庵の柱に掛け置く。

弥生[⑥]も末の七日、あけぼの[b]の空朧々として、月は有明にて光をさまれるもの[c]から、富士の峰かすか[4]に見えて、上野、谷中の花の梢、またいつかはと心細し。むつまじきかぎりは宵より集ひて、舟に乗りて送る。千住といふ所[5]にて舟を上がれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまた[⑦]に離別の涙をそそぐ。

行く春[⑧]や鳥啼き魚の目は涙

これを矢立の初めとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ち並びて、後ろ影の見ゆるまではと見送るなるべし。

問一　二重傍線部ア、イの漢字の読みを現代仮名遣いを用いて平仮名で書きなさい。

問二　波線部a、cの助詞の働きとして適切なものをそれぞれ次のア～キの中から選び、記号で答えなさい。

ア　起点　イ　順接　ウ　経由点　エ　詠嘆　オ　即時　カ　逆接　キ　比較

問三　波線部b「朧々として」は、どのような語から成り立っているか、次の例にならって答えなさい。

〈例〉　乗りて送る。→動詞・助詞・動詞

問四　点線部1～5の「に」の文法的な説明として適切なものをそれぞれ次のア～カの中から選び、記号で答えなさい。

ア　格助詞　イ　格助詞の一部　ウ　接続助詞　エ　形容動詞の活用語尾
オ　完了の助動詞　カ　断定の助動詞

問五　傍線部①「古人」に該当する人物名を二人答えなさい。

問六　傍線部②「白河の関」のような和歌に詠まれる名所旧跡を何と言うか、一語で答えなさい。

問七　傍線部③「そぞろ神の…手につかず」とあるが、このときの作者はどのような状態か、答えなさい。

問八　傍線部④「草の戸」、⑤「雛の家」とあるが、それぞれ誰のどのような家のことか、答えなさい。

問九　傍線部⑥「弥生も末の七日」とは、旧暦の何月何日に当たるか、答えなさい。

問十　傍線部⑦「幻のちまた」という表現には、作者のどのような考え方が表れているか、簡潔に説明しなさい。

問十一　傍線部⑧の句の「涙」とは作者のどのような涙か、二字の熟語で二つ答えなさい。

問十二　本文はリズミカルな文体になっている。その要因となっていることを簡潔に二点にまとめて答えなさい。

問十三　本文中には掛詞が一か所使用されている。(1)文節の形で抜き出し、(2)どのような意味が掛けられているか、答えなさい。

問十三	問十一	問 九	問 八		問 六	問 四	問 一
(1)			⑤	④		1	ア
						2	
		問 十			問 七	3	イ
	問十二						
						4	
(2)							
						5	問 二
							a
						問 五	
							c
							問 三

学 年
組
番 号
氏 名
得 点

おくのほそ道（旅立ち）　＊＊＊

〔出題の意図と留意点〕　基本古語の読み、古典常識である月の異名、「に」の識別、品詞分解および助詞の働きを確認する。文章のリズム感の要因や、掛詞を指摘させ、俳文に特徴的な文体に注意させる。また、作者の旅に生きる心情を、文脈の流れの中からつかみ、それぞれの句に表現された作者の心情を理解しているかを問う。

☆解答例と配点

問一　**ア**　かかく　**イ**　こぞ　〈1点×2〉
問二　**ａ**　**オ**　**ｃ**　**カ**　〈1点×2〉
問三　形容動詞・助詞　〈3点〉
問四　**１**　**カ**　**２**　**ア**　**３**　**ア**　**４**　**エ**　**５**　**イ**　〈1点×5〉
問五　西行・宗祇（李白・杜甫）　〈1点×2〉
問六　歌枕　〈3点〉
問七　旅へと心が駆り立てられて落ち着かない状態。　〈3点〉
問八　④　作者の住んでいた一人暮らしの寂しい家。
⑤　作者の後に住むことになった、娘のいる人の明るい家。　〈3点×2〉
問九　三月二十七日　〈5点〉
問十　この世は無常で夢幻のようにはかないという考え方。　〈3点〉
問十一　惜別・惜春　〈3点×2〉
問十二　漢語の多用・対句の使用　〈2点×2〉
問十三　(1)　立てる　(2)　春になる・霞が立つ　〈3点×2〉

計50点